

<u>CLASSE :</u>	<b>文法と文学</b> <b>GLS-11L</b>
<u>Jour :</u>	<b>Lundi</b>
<u>Horaires :</u>	<b>13:30-15:20</b>
<u>Niveau :</u>	<b>B2</b>
<u>M./Mme :</u>	<b>M. Takahiro KUNIEDA</b>
<u>Objectifs :</u>	文法構造、文法項目を精緻に分析しながら、フランス語で小説を読む。
<u>Descriptif :</u>	<p>1995年のゴンクール賞受賞作 Andreï Makine (1957-) の小説 <i>Le testament français</i> 『フランスの遺言書』 (1995年) を23年春学期から読んでいます。Makine はロシア系フランス人作家で、87年に渡仏後、フランス語で作家活動を続けています。本作はフランス人であった祖母の記憶を中心にした自叙伝的色彩が濃い内容ですが、何よりもネルヴァルやブルーストを想起させる詩情豊かな文体にその魅力があります。</p> <p>文学テキストを読む楽しみは、確かに作者の想像した世界に自らも入り込むことにあります。しかし、そこで用いられている言語そのものの正確な理解なしには作品世界の理解もありえません。この授業では、文法構造、文法項目をおろそかにせず、ひとつひとつ精緻に分析することで、作品世界をよりいっそう深く理解していくことを目的とします。</p> <p>授業の構成: 毎回2ページほど読みます。授業は講師が解説をし、受講者からの質問を受ける形式です。毎回5~6人の方に、それぞれ10行ほどの訳の宿題を出します。担当になった人は、次回の授業の前日までに自分の訳を電子媒体で講師に送ります。次回の授業の冒頭で添削済みの訳文を配布し、前回の復習と日本語訳の確認をしてから、新しい箇所に入ります。</p>
<u>Matériel :</u>	テキストのPDFを配布
<u>Remarques :</u>	23年春学期より読み始めたテキストです。1/3程度しか進んでいませんので、冬からでも授業についていくことは十分可能です。

